慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中島敦「文字禍」論：古譚を記述する方法
Sub Title	
Author	葛西, まり子(Kasai, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2004
Jtitle	三田國文 No.39 (2004. 9) ,p.1- 11
JaLC DOI	10.14991/002.20040900-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20040900-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中島敦「文字禍」論――〈古譚〉を記述する方法――

葛西　まり子

中島敦「文字禍」の初出は一九四二年（昭和十七年）二月の『文学界』であり、「山月記」とともに、「古譚」と題されて掲載された。その後の同年七月に出版された処女小説集『光と風と夢』（筑摩書房）には、先の「文字禍」「山月記」に更に「狐憑」「木乃伊」の二編をあわせ、「古譚」として収録されている。

これまでに、この四編の「古譚」を何らかの統一性あるいは連続性をもったテクスト群として位置づけようとする試みがなされてきており、その中で「文字禍」にもさまざまな意味づけが与えられ、論じられてきた。また、「文字禍」を単独で論じようとする試みにおいてもやはり、中島敦の他の諸作品との関連の中で論じられることが多かった。例えば戸塚安津子は、「作品「文字禍」で語り手が読み手にかけた〈ありのままの姿が読み取れない〉という問題は、この作品において強調された題材である《文字の霊》の害に通じるものであることがわかる。そして、〈実体〉〈真実〉〈ありのままの姿〉が伝わってこない、受け入れられないという問題は、そのまま作者中島敦の抱える大きな問題でもあったと言える。」とし、「中島敦の抱えるこの問題は、「文字禍」を挟んで初期の「かめれおん日記」「狼疾記」から後期の「悟浄出世」まで、中島の作家人生を通してのものである。」と敷衍させている。[1]

また、宮田一生は、「文字」と題された「文字禍」の先行テクストと見られる作品との比較の中で捉えている。宮田は、野口武彦の「さすがに中島敦の鋭敏な感覚は、『歴史とは何か』を問うことが、すでに古代オリエントの時代から、人間にとって永遠の大問題であることを見逃さなかった」[2]という「文字禍」についての指摘を受け、「野口氏は「若い歴史家」「イシュディ・ナブ」の言葉に注目したようだ」[3]と判断している。そして、テクストにおける「イシュディ・ナブ」の「歴史とは、昔、在つた事柄をいふのであらうか？　それとも、粘土板の文字をいふのであらうか？」という言葉を引用しつつ、次のように論じている。

> 野口氏はおそらく中島敦の歴史に対する自覚的な意識感覚に対して賞賛の言葉を送ったのであり、『文字禍』の世界そのものに対してではあるまい。（中略）ただ、現在、『文字禍』の草稿として残されている『文字』では、歴史家のナ

ブ、エリバ博士に加えて王室天文台長ナブ・イクビの三者の鼎談という形式をとりながら、歴史論議が続いている。したがって『文字』は文字の霊の存在の有無という点が中心ではなく、むしろ、歴史論議を中心とした作品と言え、野口氏の指摘は、むしろ『文字』に対して与えられるべきであり、『文字禍』にはさほど有効であるとは言えない。[4]

そして、「『文字禍』は「分析病」という中島の作品にしばしば見られる常套的問題へと変質してしまった。[5]」と、やはり「分析病」というコンテクストに回収し「文字禍」を捉えている。[6]このように、「分解癖」「分析病」というモチーフに焦点化して「文字禍」を捉えることは、中島敦という作者のコンテクストを参照した時には有効かもしれない。しかし、「文字禍」のテクストそのものを見ていくと、こうした「分解癖」「分析病」には収まることのできない部分が大きいように思われる。本論では「文字禍」のテクストを外部情報をひとまず措いて捉え、特に「アッシリヤ」という時間に属する物語がどのように語り／記述されているのか、という点に着目して分析する。そして、その語り／記述する方法の特徴を探ることで、〈古譚〉としての「文字禍」とは何か、ということを考える端緒としたいと思う。

1、「アッシリヤ」のパラダイム

テクストの冒頭においては、「文字の霊などといふものが、一体、あるものか、どうか。」という問いかけがまず示される。この問いは一見、「霊」という非日常的なものが存在するのかどうか、と読者に問い掛けているように考えられる。しかし、この問いかけの役割はそれだけでは終わらない。続く段落において、「アッシリヤ人は無数の精霊を知つてゐる。夜、闇の中を跳梁するリル、その雌のリリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の霊エティンム、誘拐者ラバス等、数知れぬ悪霊共がアッシリヤの空に充ち満ちてゐる。」と、「アッシリヤ人」が「霊」そのものの存在を自明のものとしていることが示されるのである。そのような「アッシリヤ人」もまた、「しかし、文字の精霊に就いては、まだ誰も聞いたことがない。」のであり、「霊」の存在を自明であると考えている「アッシリヤ人」にとっても、冒頭の問いかけは意味を成すものであったことが分かる。

ここでの「アッシリヤ人」については、以降の記述から、「アシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃」に「アッシリヤ」の「ニネヱ」に住む人々であることが分かる。「霊」の存在を認める彼らが、「霊」についてどのように考えるのかが次に記される。それによれば、「夜、闇の中を跳梁するリル、その雌のリリツ」とは、これはどのような性質のものか全くわからないものの、「夜」「闇」という、人間の認識の届きにくい現象にまつわる「霊」なのだろうと考えられる。さらに後の「疫病をふり撒くナムタル、死者の霊エティンム、誘拐者ラバス等」といった例を考え合わせるに、「霊」とは、人間の力や人知の及ばない現象について説明をつけるための〈物語〉であると思われる。「疫病」という人間の太刀打ちできない現象や、「死者」という想像するしかない存在、また霊による「誘拐」というのもおそらく神隠しなどに対する説明であろう。こうした「霊」

の延長線上にに、後の「死神エレシュキガル」も浮かんでくる。「神」という名称にこそ「霊」との差異化が見られるが、人間の範疇を超える現象を超人格化し、それに命名するという行為は、「霊」の場合と同様であると言える。

こうして人間の枠外に形成される「霊」という存在はしかし、「アッシリヤ」においては、生物と同じルールを適用して考えられている。それは例えば、「夜、闇の中を跳梁する」という性質を持った「霊」に、雄と雌の区別がなされているということに現れているだろう。また、「アシュル・バニ・アパル大王」が病に伏した折に、「侍医」が「大王」の衣裳をまとって「死神エレシュキガルの眼を欺」こうとしたのも、「死神」に人間等の生物と同じように「眼」があると考えての行為である。

このような「霊」を生成する思考方法自体はとりたてて珍しいものではないであろう。ただ、ここでは「アッシリヤ人」らが「霊」にまつわる物語を共有していることに見られるような、ある一定の物の見方・考え方――言うなれば「アッシリヤ」のパラダイムとでも呼ぶべきものが、このテクスト内の物語現在において存在していることを確認しておけばよいであろう。

そのような「アッシリヤ」のパラダイムは、「毎夜、図書館の闇の中で、ひそ〳〵と怪しい話し声がする」という、説明のつかない現象もまた、同じようにそのパラダイムに回収していく。闇の中から声が聞こえるという不可思議な現象は「アッシリヤ人」にとって人間の範疇を超えたものであると認定するしかないので、「文字の霊」という存在を措定するに至るのである。またその際に、「最近に王の前で処刑されたバビロンからの俘囚共の死霊の声だらうといふ者もあつたが、それが本当でないことは誰にも判る。千に余るバビロンの俘囚は悉く舌を抜いて殺され、その舌を集めた所、小さな築山が出来たのは、誰知らぬ者のない事実である。舌の無い死霊に、しゃべれる訳がない。」との推定がなされているが、ここでもやはり、「死霊」であっても声を出すためには舌が必要であるという、「霊」を生物のルールに沿った存在として考えようとする思考がある。「アッシリヤ人」は「文字の霊」を措定するために、これまでと同じ「霊」認定のプロセスを踏んでいるのである。

2、ナブ・アヘ・エリバの〈物語〉

そうした措定を引き受けてナブ・アヘ・エリバが「文字の霊」を「研究」しはじめる。このナブ・アヘ・エリバも当然ながらこれまでに確認したような「アッシリヤ」のパラダイムの中で生きているのだが、しかしナブ・アヘ・エリバが文字の研究のために、文字そのものを見つめるという行動に出たときに、そこにずれが生じはじめる。ここでナブ・アヘ・エリバが行う研究とは、それまでは自明であったものを改めて見つめなおすという作業となっている。そのままでは「文字の霊」について、書物の中に何らの示唆を得ることも出来なかったナブ・アヘ・エリバは、「アシュル・バニ・アパル大王」に報告することがかなわないだろう。そのためナブ・アヘ・エリバは「文字の霊」を何としても見出さねばならず、それまでは尋常な現象であったはずの文字に異常な現象を見出していこうとするのである。

一つの文字を長く見詰めてゐる中に、何時しか其の文字が解体して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて来る。単なる線の集りが、何故、さういふ音とさういふ意味とを有つことが出来るのか、どうしても解らなくなつて来る。老儒ナブ・アヘ・エリバは、生れて初めて此の不思議な事実を発見して、驚いた。今迄七十年の間当然と思つて看過してゐたことが、決して当然でも必然でもない。彼は眼から鱗の落ちた思がした。

凝視によって得られた真実とは、文字はただの線の交錯であるということであり、そこに意味が付与されて「文字」として扱われるという奇妙な現象こそ、文字の霊の所業であるとナブ・アヘ・エリバは考える。ナブ・アヘ・エリバによって示されたのは、ある記号表現に特定の記号内容が結びついて記号となるという、ソシュール的な記号としての文中の性質である。[7] そこに書かれた文字が、「アッシリヤ」で流通している記号である以上、そこに一定の意味が託されることは、「アッシリヤ人」にとっては何らの不思議もないはずの現象であろう。ナブ・アヘ・エリバは、「文字の霊」の研究という目的のために、あえて不思議な現象を自ら見出してしまっているのであり、その意味では「文字の霊」が先に措定されているのだと言える。つまり、ナブ・アヘ・エリバは「文字の霊」の研究という目的を持ったときに、先に「霊」の存在を措定し、そこには不思議な現象を予期し見出していくという方法をとったのであり、それは「アッシリヤ」のパラダイムとは全く逆の思考方法である。「アッシリヤ」のパラダイムにおいては、「霊」とは不思議な現象を説明するために存在するのであり、不思議な現象を後付けで見つけようとするナブ・アヘ・エリバはそうした「アッシリヤ」における「霊」の〈物語〉から逸脱しようとしているのである。

また、先に触れたように、記号としての文字を「単なる線の集り」として捉えてしまったナブ・アヘ・エリバは、その意味でも「アッシリヤ」のパラダイムからはずれていく。ナブ・アヘ・エリバは「最近に文字を覚えた人々」が文字を覚える以前、つまり文字の霊の影響を受ける以前と比べてどう変化したかを調査し、これによって文字の霊の人間に対する作用を明らかにしようとするのだが、その調査結果は、以下のようなものであった。

「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰ヒアラスコト、猶、蛆蟲ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿チテ、中ノ実ヲ巧ニ喰ヒツクスガ如シ」
「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」
「文字ノ害タル、人間ノ頭脳ヲ犯シ、精神ヲ麻痺セシムルニ至ツテ、スナハチ極マル」

最後の結論めいた一文を導き出している前二つの調査結果は、文字の記号としての作用ではなく、その記号という実体が、粘土板に書かれたものであるために起こる現象である。「アッシリヤ」で使われているのは楔形文字であり、粘土板に楔形の模

様を刻み付けて綴っていくものである。文字を読み書きすることによって、「眼」はともかくとしても「鼻・咽喉・腹等」に害があるというのは、粘土板という物質を取り扱う上での人体への影響であるとも考えられるだろう。そうして記述される文字は、凹凸によって空間を占有することで浮かび上がる記号であり、また粘土板という媒体それ自体の外見もあり、紙に書かれた文字よりもはるかに物質的な文字であると言えよう。いずれにせよナブ・アヘ・エリバの考察においても、最後にはその主体が「文字ノ精」ではなく「文字」と摩り替わっていることからも、これらの現象は厳密には「文字の霊」による作用とは言いがたく、文字そのものによる作用であると考えられる。しかしナブ・アヘ・エリバはこれらを「文字の霊」による現象だとしてしまう。ナブ・アヘ・エリバにとっての文字とは、記号としての文字から、記号ではない文字、言ってみれば物質としての文字へとずれていくのである。

しかしそれは、誰にも共有され得ない〈物語〉である。先に確認したように、「アッシリヤ」の人々は、文字を記号としてのみまなざしている。文字が記号としてしか認識されていない以上、文字が物質であることには着目されず、「アッシリヤ」の人々にとっては、文字はその記号内容とのつながりの中でしか捉えられていないのである。粘土板に刻まれる楔形文字は確かに、紙に書かれる文字よりもはるかに物質的であり、そのことは例えば「書物狂の老人」が粘土板を砕いて口にすることを可能にしている。しかし、「書物狂の老人」がそのような行為に至るのは、それが「ギルガメシュ伝説の最古版の粘土板」であればこそである。「書物狂の老人」は「粘土板」を「書物」として見なしているのであり、言いかえればそれは文字をただの線の集まりではなく意味を持つ記号と見なしているためなのである。こうした「アッシリヤ」の文字をただの物質ではなく記号として見なす「アッシリヤ」のパラダイムからも、ナブ・アヘ・エリバはずれて行くのである。

ナブ・アヘ・エリバの「文字の霊」に関する認識は「アッシリヤ」のパラダイムから外れており、またそこでまなざされている文字それ自体も「アッシリヤ」の記号としての文字とは離れ、物質としての文字となってしまった。である以上、ナブ・アヘ・エリバが作り出した「文字の霊」に関する〈物語〉を「アッシリヤ」の人々が共有することは不可能なのである。ナブ・アヘ・エリバは自分の作り出した文字の霊の〈物語〉が「アッシリヤ」では共有され得ないことに気づかぬままに「アシュル・バニ・アパル大王」に報告し、「いたく大王の御機嫌を損じ」てしまう。そして、ついには地震により崩れ落ちる「夥しい書籍が——数百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪の声と共に此の讒謗者の上に落ちかゝり、彼は無慙にも圧死した」というカタストロフが訪れる。記号である文字が、ただの物質としての文字となったことによって、「書籍」はもはやただの重量ある「粘土板」としてナブ・アヘ・エリバに落ちかかって来たのである。ある意味では確かに、ナブ・アヘ・エリバは「文字の霊」によって命を落としたのだと言えるだろう。「アッシリヤ」のパラダイムから離れた物質としての文字こそが、ナブ・アヘ・エ

リバの「文字の霊」を作り出したのだと言えるからである。

こうして、「アッシリヤ」のパラダイムから外れてしまったところに起きたカタストロフがナブ・アヘ・エリバの〈物語〉であり、テクストの名ともなっているような「文字禍」と言うべき物語であると一先ずは言えるだろう。

3、記述という行為

しかし、「文字禍」というテクストを分析するためには、これまで見てきたようなナブ・アヘ・エリバの〈物語〉を包含する「アッシリヤ」における物語の析出だけでは事足りないだろう。すなわち、このテクストが「古譚」という枠の中で語られていることの意味と、それによってテクストがどのように影響を受けたのかを分析し、それを「アッシリヤ」での物語に重ね合わせるという作業が必要なのである。そこで、まずはこのテクストの「古譚」としての性質について見ていきたい。

この物語を物語る主体が「文字禍」を「古（いにしえ）」の「譚（はなし）」と見なして語り／記述する時、その主体はどのような時間に存在しているのか、またどのような時間の読者に対して語りかけているのか、ということを考えるべきであろう。まず、「古」とは、一体どの程度はなれた時間を指すのであろうか。おそらく、時間の量的な差異は問題とはならないだろう。その物語を語り／記述する主体が物語内容を「古」のものとして認識し、且つそのように明示し、そしてまたそれを読む者がそれを「古」のものとして認識してはじめて、「古譚」という名を冠されたテクストは成立する。逆に言えば、例えテクストが時間的に過去のものとなる物語内容を持っていたとしても、語り／記述する主体がその時間と共時的な存在として物語るのならば、それは「古譚」たりえないだろう。「文字禍」というテクストが「古譚」という枠内に組み入れられるのは、その物語内容において「アッシリヤ」、もう少し詳しく言えば「アシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃」という舞台設定がなされているから、という理由だけではない。そのような物語の時間を過去のものとしてまなざしそれを語り、更にまたこのテクストにおいてより重要なのは、それを文字として記述する主体がテクスト内に明確に示されているということのためなのである。

アッシリヤ、あるいはアッシリアとは、紀元前六〇〇〇年頃に起源を持ち、前六〇九年に滅亡した、古代オリエント最初の世界帝国を築いた国家の名である。アッシュールバニパル王の在位は紀元前六六八年から六二七年とされている。よって、このテクストにおいて示される「アシュル・バニ・アパル大王の治世第二十年目の頃」という時間設定から、物語の現在は紀元前六四八年頃であると推定できる。そして、「問題の図書館」に対し、「（それは、其の後二百年にして地下に埋没し、更に後二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものであるが）」とあたえられる注釈は、西暦一八四二年にフランス人のボッタがニネベで、そして一八四五年にイギリス人のレヤードがニムルドで発掘を開始したこと、そしてニネベにおいてアッシュールバニパルの書庫が発見され、二万二千枚に及ぶ粘土板が発見され

たことを踏まえたものであると考えられる。以上の事実関係とテクスト内表記から、記述者がこのような表記をなすことの出来る時間は西暦一八五二年以降でなければならない。自然それは、「文字禍」の発表された一九四二年へと重ねられてゆくことであろう。よって、テクスト記述者の現在は、一八五二年から一九四二年の間に設定され得る。この「アッシリヤ」の時間という物語の現在と、作者やひいては読者を想定し得る記述者の現在という二つの時間の間隔が、「文字禍」を「古譚」たらしめているのである。

テクスト内の随所において刻まれる、これら物語の現在と記述者の現在との間隔を示す表現は、単にこのテクストを「古譚」たらしめるだけのものではなく、テクストにとって重要な意味を持っている。

物語の現在と記述者の現在、ひいては読者の現在とを隔てる約二五〇〇年から二五九〇年という時間を結ぶものは、一般的には先に触れたボッタ、レヤードらによるような、発掘という行為である。発掘によって示される過去への志向は、より端的に言えば解読するという行為に他ならない。例えば、発掘の結果、動物の骨や皮、そしてまた「粘土板」などに何らかの加工が発見された時に、それらの骨や皮、粘土の板を「書物」として分類することがある。なぜそのように考えることが出来るのかと言えば、そこに刻み付けられた記号を文字であると判断し、それを解読し、解釈していく志向・行為を前提にしているためである。解読されなければ、それらは「単なる線の集り」などの模様がついた骨や皮や粘土の板でしかない。発掘後の時間においては、模様を記号であると措定すること、解読するという（あるいは、しようとする）行為こそが、その物質を「書物」化するのである。過去への志向は、物質を解読してそこに意味を見出していこうとするそれとして、現われるのである。

このテクストの記述者は、物語の現在である「アッシリヤ」の時間を、記述者ならびに読者の現在において語る際、これとよく似た過去への志向を持っている。

その日以来、ナブ・アヘ・エリバ博士は、日毎問題の図書館（それは、其の後二百年にして地下に埋没し、更に後二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものであるが）に通つて万巻の書に目をさらしつゝ研鑽に耽った。両河地方（メソポタミヤ）では埃及と違つて紙草（パピルス）を産しない。人々は、粘土の板に硬筆を以て複雑な楔形の符号を彫りつけてをつた。書物は瓦であり、図書館は瀬戸物屋の倉庫に似てゐた。老博士の卓子（その脚には、本物（ほんもの）の獅子の足が、爪さへ其の侭に使はれてゐる）の上には、毎日、累々たる瓦の山がうづたかく積まれた。其等重量ある古知識の中から、彼は、文字の霊に就いての説を見出さうとしたが、無駄であつた。

まず、記述者は「問題の図書館」を「（それは、其の後二百年にして地下に埋没し、更に後二千三百年にして偶然発掘される運命をもつものであるが）」と記述し、物語現在においては「図

書館」であるところのものは、その後「地下に埋没し」た後に「発掘され」たものであるのだと示していく。これは、「図書館」が発掘される物質と化した記述現在の視点からみた「図書館」の説明である。そのような「図書館」は、記述現在においては「瀬戸物屋の倉庫」のようにしか見えないものなのである。こうした記述の仕方には、直接明記されてはいなくても、記述者が「瀬戸物屋の倉庫」のような物質を、「図書館」なのだと解読した過程が織り込まれていると言える。

このような記述方法は他の場所にも見られる。後には、例えば「大マルヅック星」を解読して「(木星)」と言い直し、同じように「天界の牧羊者」を「(オリオン)」と言い直していくのである。括弧を利用してのこうした記述もまた、テクスト記述の解読という性質を浮き彫りにして、物語の現在を記述者の現在において意味づけしなおしていくものである。

しかし、このテクストの記述者の作業は、そうした一方向的な発掘に留まらない。その「図書館」に収納されるべき「粘土板」の記述は、更に複雑になっていくのである。物語現在においてナブ・アヘ・エリバが眺める時には「万巻の書」「書物」として機能している物質は、記述者現在の目にとっては単なる「粘土の板」に「複雑な楔形の符号」が刻まれているものに過ぎない。言ってしまえば、それは「瓦」のようなものとしか見えない物質なのである。だが記述者は、「瓦」を「書物」であると解読した後も、再び「累々たる瓦の山」と名指し、「重量ある古知識」と言い換えていく。

ここで行われている操作は、単に記述者の現在においては「瓦」としか見えない「粘土板」が、「アッシリヤ」の時間においては「書物」なのだ、と一方向的に理解するだけには留まっていないのである。「粘土板」は、物語の現在においては「書物」なのであるのと同時に、記述者の現在においては「瓦」である。物語の現在すなわち「アッシリヤ」の文字で書かれた「書物」は記述現在の人間にとってはなんの意味ももたない物質であり、それは模様の刻まれた「瓦」でしかない。しかし、それぞれの視点を交叉させ、「書物」と「瓦」とを対応させて取り結んでいくものが、「アッシリヤ」の物語を後代に伝え得る「粘土板」なのである。記述者は「粘土板」を仲立ちとして、「瓦」と「書物」とを併記してみせるのである。こうした記述のゆらぎを示すことそれ自体が、記述者の現在においては「瓦」のようにしか見えない「粘土板」と、物語の現在において「書物」として扱われる「粘土板」とを相互に接続していく営為であると言えよう。

記述者はこの「粘土板」という言葉を浮き上がらせ続けていく。「粘土板」という「瓦」にも「書物」にもなりうる可逆的な状態の物質が、書き綴られていくのである。テクストを縦断するこの「粘土板」が二つの時間を繋ぎ続けるのである。

このような「粘土板」によって生まれるのは、もはや「アッシリヤ」の物語そのものではなく、後の時代からまなざした「アッシリヤ」の物語でもない。そこに生まれるのは、言ってみれば、発掘者によって再生成された、新しい物語である。物語現在にも記述現在にも一定しない記述者の語りは、物質を仲

立ちとして、それぞれの時間の記号と記号とを取り結ぶ行為であると言える。

そもそも、過去をそのままに物語ることは不可能である。解読という作業は、常に過去の時間の物語を現在の時間において語りなおすことに他ならず、現在の時間において語られる物語は過去の時間のそれと完全に一致することはあり得ない。しかしこのテクストの記述者は「アッシリヤ」の物語の現在と記述者の現在を取り結んで書きつづける。それは、二つの時間を完全に一致させ、過去の時間を再生することの不可能性をあえて示しながら、しかしそれを引き受けていく記述である。

ナブ・アヘ・エリバはある「書物狂の老人」について、彼は「凡そ文字になつた古代のことで、彼の知らぬことはない」が、今日の天気も隣人を慰める言葉も知らず、惨めななりをしているため、「文字の精霊の犠牲者の第一」であると考えている。しかし、「斯うした外観の惨めさにも拘はらず、此の老人は、実に――全く羨ましいほど――何時も幸福さうに見える」ことに、ナブ・アヘ・エリバも一旦は不審を抱く。ナブ・アヘ・エリバはそれをも「文字の霊の媚薬の如き奸猾な魔力の所為」であると見なすが、「霊」の存在を自明視しない者、つまり「アッシリヤ」のパラダイムを持たない者にとっては、それは老人の「幸福」を説明したことにはならない。では、そのような記述をあえて行うのは、なぜなのか。テクストを記述することによって、解読する行為それ自体を示していこうとする記述者は、この「不審」を解くものを知っているのかもしれない。なぜなら、現在を省みず過去に耽溺している「書物狂の老人」の「幸福」は、その「幸福」の当否は別としても、過去と現在を結ぼうとする記述者にとっては可能体の一つであるかもしれないからだ。

文字によって記述する行為、そしてそれを解読しようとする行為の可能性を、このテクストの記述それ自体が示そうとしているのではないだろうか。

4、「古譚」としての「文字禍」

さて、ナブ・アヘ・エリバの物語に話を戻そう。「文字の霊」によって禍を被ったナブ・アヘ・エリバは、ある意味では「アッシリヤ」のパラダイムを一人離れ、記号としての文字をうしなうことによって、物質としての文字をまなざすことが可能になったのだとも考えられる。また、文字が「単なる線の集り」、つまりただの物質となってしまったナブ・アヘ・エリバは、次第に他のさまざまな物質においても不思議な現象を見出していく。

彼が一軒の家をじつと見てゐる中に、その家は、彼の眼と頭の中で、木材と石と煉瓦と漆喰との意味もない集合に化けて了ふ。之がどうして人間の住む所でなければならぬか、判らなくなる。人間の身体を見ても、其の通り。みんな意味の無い奇怪な形をした部分々々に分析されて了ふ。どうして、こんな恰好をしたものが、人間として通つてゐるのか、まるで理解できなくなる。眼に見えるものばかりではない。人間の日常の営み、凡ての習慣が、同じ奇体な分析病のために、全然今までの意味を失つて了つた。最早、人

間生活の凡ての根柢が疑はしいものに見える。

文字以外のさまざまな物質に「文字の霊」によるものと同じような不思議な現象が起こり始める。ナブ・アヘ・エリバにおいて、物質としての文字と、その他の物質との、そしてついには人間との差異までが消去されていくのである。眼に映じる物質すべてが、等しく疑わしいものになっていく。

このような視線は、物質それ自体に着目していくという意味では、先に見たような記述者の志向と繋がる可能性を有しているはずである。ただ、ナブ・アヘ・エリバ自身はそのことに気付いてはいないものと考えられる。例えば、若い歴史家が「歴史とは、昔、在つた事柄をいふのであらうか？　それとも、粘土板の文字をいふのであらうか？」という問いを発したときに、ナブ・アヘ・エリバは「歴史とは、昔在つた事柄で、且つ粘土板に誌されたものである」と断じて見せる。ここでナブ・アヘ・エリバが答えているのは、文字を記して残さなければ「昔在つた事柄」であっても伝達することがかなわないのだということであり、すなわち記号としての文字の効能だけではなく物質としての文字の役割を示すものである。しかし、ナブ・アヘ・エリバ自身は文字が「単なる直線どもの集り」と化したことを「文字の霊」のもたらした「恐しい病」としてしか認識していない。そのため、この話題もまたこれ以上発展することはなく、ナブ・アヘ・エリバは物質としての文字の役割を説いた自らの言葉を「どうやら、わしは、あの青年に向つて、文字の霊の威力を讃美しはせなんだか？」と考え、「わし迄が文字の霊にたぶらかされをるわ」と、すべてを「文字の霊」のせいであると考えてしまう。だから、ナブ・アヘ・エリバの中では、記号としての文字と物質としての文字の差異の問題は、あいまいなままに終わるしかない。それに、いずれにせよナブ・アヘ・エリバの見出しかけた、物質としての文字の可能性は、物語の現在においては有効だとはいえないだろう。その可能性は、ナブ・アヘ・エリバを含め、「アッシリヤ」のパラダイムの中にいる物語の登場人物達によってしか判断され得ないためである。そして、そこから遊離していこうとするナブ・アヘ・エリバですら、自覚的にはそれをなしえていない以上、「アッシリヤ」という限界をやはり背負っているのである。

しかし記述者は、そのようなナブ・アヘ・エリバの紡ごうとした〈物語〉を、「アッシリヤ」という物語の現在と、そして記述者の現在との間にたゆたわせ、「文字禍」という物語として記述していく。

「文字禍」というテクストを、物語を記述するという面から見たときに浮かび上がる以上のような側面は、この物語における新たな問題を投げかけてくれるだろう。つまり、このテクストにおける記述者の記述行為それ自体が「古」を「譚」を語る／記述する行為の一つの可能体なのであり、またそれを示すことは「古」の「譚」をどのように語り／記述し得るのか、という問いかけでもあるのだと言えよう。

本論では、「文字禍」における記述主体の役割とその志向に着目して考察し、テクストそのものの志向を論じるに留めた。こ

れまでに見たような志向を内在させている「文字禍」を、「山月記」「木乃伊」「狐憑」といった残りの「古譚」テクストの中に位置付けた時に、そこにどのようなダイナミズムが生まれるのか、更に論じる必要があるだろうが、それは別稿にゆずる。

（1）戸塚安津子「『文字禍』考」（『百舌鳥国文』十三、一九九七年）
（2）野口武彦『江戸の歴史家　歴史という名の毒』（筑摩書房、一九七九年）
（3）宮田一生「『文字禍』論」（『日本文芸研究』四十五-一、一九九三年）
（4）（3）に同じ
（5）（3）に同じ
（6）この他、例えば中島甲臣も「中島敦論　文字・歴史・歴史記述――「李陵」、「文字禍」を中心として――」（『北海道武蔵女子短期大学紀要』二十九、一九九七年）の中で、「文字禍」を「かめれおん日記と狼疾記」に見られる「分解癖（存在の不確かさ）と、感覚と観念の認識論的対比、の変形である行動と観念の対比、が核になって形成された作品」として位置付けている。また、奴田原論は「相対化の試み」（『二松』十六、二〇〇二年）において、「ディテイルにこだわること」という点で「狼疾記」「悟浄出世」との関連を示し、「文字禍」におけるナブ・アヘ・エリバを「「文字の霊」は存在するか否か、という問いに〈憑かれた〉者」とし、「書物狂の老人」を配置することで「書き手は「文字禍」に於いて〈憑かれる〉ことに対して作中で相対化を試みた」と論じている。また、『古譚』論においても、例えば鷺只雄が「「古譚」――物語の饗宴」（『中島敦論――「狼疾」の方法』有精堂、一九九〇年）において、ナブ・アヘ・エリバの「〈分析病〉を「存在の不確かさへの疑惑」と捉え、「それは曾て痼疾となって作者の中島にとりつき、「北方行」の折毛伝吉、「狼疾記」の三造等の口を通して、繰り返し苦渋にみちた声で語られたものであることをここに想起したい。」と述べている。
（7）勝又志保は「中島敦『文字禍』論――時代を諷するアレゴリー――」（『国文』九十二、二〇〇〇年）において、中島敦のソシュール受容の可能性について論じている。

本文中の引用は『中島敦全集　第一巻』（筑摩書房、一九七六年）に拠っている。その際、旧漢字を新漢字に改めた個所がある。